ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

「あ、おかえり。ロラン！　どうだった？」

「おぅ、どうだったいっ？」

「かえりなさい、ロラン。どうでしたか？」

　あれから数十分後。部屋に戻ってきた俺に、新しい服に着替えた皆が口々にそう聞いてくる。俺が帰ってきた、ということもあってか、皆の顔は光を受けたグラスの如く輝いているように見えるのは、俺の気のせいでは無いだろう。

　それ故、だからこそ。俺は、非常に申し訳無い気持ちでいっぱいだった。

「た、ただいま……」

　自分でも分かるくらい、俺の声に力は無い。なんというか、あれだ。もし俺が洲王中等の入試に落ちていたら、きっとこんな気分になったのだろう。皆の期待を裏切ってしまったような、そんな感じである。

　いや、本当に申し訳無い。

だが、だからこそ、これは正直に伝えなければならないだろう。一度出て行った俺を受け入れてくれた、樹葉、レイ、詠の三人に対する礼儀である。ここで嘘を吐いてしまっては、失礼極まりないというものだ。

「え……えっとだな」

　とはいえ、だからと言ってあっさり伝えることなど簡単な話では無い。気づけば俺は、三人から視線を逸らしていた。三人がそれに気がつかなかったのは、幸いというべきか否か。

　てか、やめろ。そんなキラキラした目で俺を見るな。いややめてくださいお願いします何でもしますから――

「ロラン、どうしたの？　まさか……？」

「――っ！」

　樹葉の声で、俺は現実に戻る。どうやら無意識に、思考の世界へと逃避していたらしい。

　俺はコホンと咳を一つすると、何やら悟ってしまったような目をする三人に向かって、ゆっくりと頭を下げた。

「ごめん。返してもらえなかった」

「えっ？」

「はい？」

「嘘でしょっ？」

　悟ってはいても、驚きは隠せないらしい。無理も無い。俺だって同じ気持ちなのだ。

　実は今し方、下の格技場にいるマルクスさんに、『ヘヴンズ・ギア』と『ヘルズ・ギア』を返して欲しい旨を伝えに行ったのである。没収された理由も分かったし、ちゃんと皆にも謝ったし、これなら大丈夫だろう。そう思ったのだが……マルクスさん曰く、まだ没収した理由の半分しか理解していないと言われてしまった。

　まあ、そこまで辿りついたことに関しては褒められたのだが、素直に喜べないのもまた事実。

「没収された、後半分の理由ってなんだよ……」

　ついついこんな愚痴を吐いてしまうのも、無理からぬことでは無いだろうか？

「……まあ、しゃーない！」

　何となく重い空気になってしまった中、レイがそう言って、両手をパンパンッと鳴らす。

「別に、今すぐ任務があるわけじゃ無い。来るとしても、当分先でしょ？　ゆっくり考えればいいんじゃない？」

「……だな。ま、ゆっくり見つめてみるよ」

　何となく、気分が軽くなった気がする。

「……ん？　ロラン、どうしたん？」

「いや。流石、リーダーだなって。なんつーか、ありがとう」

「はっはっは、褒めても何も出ないぞー？」

　思ったことを素直に伝えると、レイはケラケラと笑いながらそう言う。

「んじゃ、ちょっと着替えてくるわ」

　そう言って俺は自分の部屋に向かう。昨日からずっと同じ服で、少し汗もかいた。落ち着いてから気がついたのだが、着ていてあまり気分のいいものでは無い。さっさと清潔なものに変えたかった……というのは建前である。

　実はちょっと、一人で考えたかったのだ。家出の一軒が取り敢えずは解決し、それから少し引っかかるものがあった。

　いや、具体的に何が引っかかるのか、と聞かれると答えられるわけでは無いのだが。

「……」

　部屋に入って、クローゼットから新しい着替えを取り出しながら、俺は考えを纏めていた。

　といっても、纏められる、と言える程の情報は無いのだが。

　考えているのは、あの夜。『闘悟』――便宜上、こう呼ばざるを得ないのは癪だが――についての事だ。

　何であいつがトラブレなんかに入りやがったのか。それが気になっていた。

　勿論、あいつがどのチームに入るか、なんてあいつの勝手なのだが……だからこそ、あいつは一体何を考えているのか、気になった。

　明確に伝えた事など無いが、それでも『研修所』にいる段階で、多かれ少なかれ『チーム』に入って『トラース』を手に入れたい、と考えていることは想像に難く無いだろう。というかあそこのカリキュラム的に、そういう教育を受けている。まともな奴なら、トラブレなんか行くわけが無い。

　余程の事でも無い限り、『トラース』を破壊する、なんて考えにはたどり着くわけが無いのだ。

　そして、あいつにその『余程の事』が無かったことは断言できる。基本的に、俺達は一緒にいたからだ。まあ、俺は昼休みは友美さんからカウンセリングを受けていたのだが、その短時間で何かあったとは考え辛い。

「あの馬鹿は……何を考えて……」

　気が付けば、あいつへのイライラからか、服を着ながらブツブツと悪態を吐いていた。

　あいつが最初から『トラース』を破壊するつもりなら、何故俺と一緒にいたのだろう。なあなあの関係が許されないあの場所で、まさか俺をトラブレに引き込めるとでも思っていたのだろうか？

　阿呆らしい。

　あの世界を壊すということは、あの『研修所』での日々を、全て無駄にすることに等しいのだ。俺のあそこでの生活は、全て『チーム』で活躍するためのものだったから。

それだけじゃない。『トラース』がなくなれば、俺達『ワルキューレ』を含めた、全ての『チーム』のメンバーは、ただの一般人になりさがる。それはトラブレも例外では無い。まだ俺のような学生ならともかく、お姉様や木藤さんのような方々は、今更新しい職を見つけることなど難しいだろう。

そこを分かった上で、そうさせる覚悟があった上で、あいつはトラブレに入ったのだろうか。

　と、そこまで考えた時だった。

「……ん？」

　ふと、俺の頭に一つの疑問が浮かんだのだ。さっきまで考えていたこととは別の、もっと根本的なもの。

「……いや、まあ、後で誰かに聞いてみようか」

　嫌な汗が一筋、頬を伝ったものの、俺はそう呟いて着替える手の動きを早める。

　さっさと着替えを終えた俺は、浮かんだ疑問を片隅に追いやって部屋を出た。

「なあ、これからどうする？」

　今日は平日。それもまだお昼にもなっていないこの時間。

　流石に今から学校に行くのもなんだかな、という気がした俺は、テーブルでだらけてる三人にそう聞いた。

「学校に行く……のはあれだねぇ」

「だねー」

「ですねー」

　どうやら三人も俺と同じ事を思っているらしい。

　そう言えば、皆は今日、どんな理由で学校を休んだのだろう。

　空いている椅子に座りながら、俺は三人に聞いてみた。すると、

「風邪」

「あー、私も」

「僕もですね」

「お前等……もし外に出て、誰かに見つかったらどうするつもりだったんだよ……」

　なんて答えが返ってきて、自分のためと分かってはいても、俺は溜息を吐かざるを得なかった。

「ん？　そんときー？」

　そう言いながら、俺の方に顔を向けるレイ。

　不敵な笑みを浮かべているつもりなのだろうが……だらけた顔がまだ抜けきっていないせいで、あまり決まっていなかったのは言ってやった方がいいのだろうか。

「ま、そん時はそん時かなー。適当な事言って、上手く逃げる」

「雑っ？　なんつーその場凌ぎっ？」

「ふっ、その程度のアドリブが出来ないようじゃ、リーダーなんか務まらんのよ」

「メガネをクイッとしようとしたのは分かるが、メガネかけてない奴がやっても滑稽なだけだぞ……」

「えっ？　嘘っ？」

　慌てて樹葉と詠の方を見るレイだが、二人はサッと目を逸らす。

　それで察したのか、レイは頬をピクつかせた。

「でも、本当にどうします？」

　そんなレイは無視して、詠は椅子にきちんと座り直し、姿勢を正して皆にそう聞いた。

「お昼ご飯にはまだ早いですし、遊ぶにしても、何もありませんからね……」

　詠の言葉に、俺も頷く。うちにはゲームとかＤＶＤとか、そういう類の遊び道具は一切置いてないのだ。

　いや、別に遊び道具を買っちゃいけない、なんて決まりがあるわけでは無いのだが……そこはあれだ。俺がそういう遊びには大抵不参加なので、三人共遠慮している、の……かもしれない。

　うん。俺のせいだな。

「……どうしました、ロラン？」

　頭を抱えて罪悪感に苛まれた俺に、詠が心配そうな声を掛ける。やめて、そんな優しい声をかけないで。

「……ん。まあ、なんだ。大丈夫だ」

　だが、これは今更後悔しても遅い。今後はもっと、皆とちゃんと交流しようと、改めて決意した俺は、コホンと一つ咳をして、時計を見る。現在時刻は十時半。いい時間だ。

　俺は、覚悟を決めた。

「なあ、ちょっと話を聞いて貰ってもいいか？」

　そう言うと、三人の眉が一瞬、ピクンと動く。多分、俺が今から真面目な話をしようというのが伝わったのだろう。

　だから、俺は言おうとする。この三人には、知っておいて欲しいことを。

「この間の任務のことなんだが――」

「ちょい待ち」

　と、これから話そうとしたところで、レイがストップをかけた。他の二人も頷く。

　どうしたんだ、と言いかけた時、樹葉がそれより早く口を開いた。

「ロラン、いいの？」

「何がだ？」

「その……話しちゃっても。なんか、尋常じゃ無い感じだったから……その、無理しなくてもいいんだよ？」

　俺は思わず押し黙る。三人が俺を心配していることが、それで伝わってしまったから。

そしてそれを、嬉しいと感じている自分がいることに気がついたから。

　でも、俺は首を横に振った。

　三人も、絶対知りたいと思っているのは間違いない。逆の立場なら、俺だって知りたいと思う。それを堪えて、俺に時間をくれようとしてくれるその優しさに、俺は目頭が熱くなる。

　しかしだからこそ。それじゃ駄目だ、駄目なのだ。その『甘え』に乗ってしまったら、多分俺はここにいる資格が無い。いちゃいけない。

　確かにあの日のことは思い出したくもないが、それでも俺は皆に、自分とあいつとの関係を言う義務があると思う。

「……ありがとう。でも、聞いて貰いたいんだ」

　そう言うと、その気持ちが伝わったのか、樹葉達三人は、それ以上何も言ってこなかった。

「実は――」

　俺は、自分とあいつがどんな関係なのか、話し始めた。『研修所』での事、互いに互いの名付け親である事、その後連絡が取れず、どうやらあいつは改名したらしい事、全て包み隠さずに。

　三人は、俺の話す事に、途中で口を挟んで来なかった。ただ時折、詠とレイの口が微かに動いたことがあったが、それも一瞬だ。

　ありがたかった。こういう話は、一気に吐き出してしまう方が楽だ。二人がそこら辺を分かっての行動なのかどうかは知らないが、それでもこっちとしては助かる。

　ちゃんと頭の中で纏めた訳じゃ無いから、所々要領を得なかったり、つっかえたりしたものの、それでも話を聞いてくれる三人の顔は、真剣そのものだった。

　何とか最後まで説明し終えて時計を見れば、もう十二時十分前。思いの外時間が掛かってしまったが、それでも言うべきことは言えたと思う。

　いや、実は一つだけ……俺のＰＴＳＤについてだけは、まだ伝えていないのだが。

　今は俺とあいつとの関係だけ知ってもらえれば、それでいい。これ以上は、情報過多だろう。もう少し後で、おいおい話していく方が、三人にとっても理解しやすいはずだ。

　俺はこの時、心の中でそう思っていた。

　これは……言い訳だろうか？